詩集

りへがみよ

向井夷希微

始

特103
773

向井夷希微

第一詩集

よみがへり

大正
6. 5. 29
内交

父なる神に捧ぐ

よみがへり序言

拙者は本年三十七歳であります。三十七歳にして初めて此小詩集を出して、拙者も詩人の端くれであることを知つて頂きたいと思ふのであります。

拙者は元來北海道に育つたものでありますが、明治三十三年拙者の二十歳の年に九州の或中學を出て、文學修業の目的を以て東京に遊學し、翌年迄在京しましたが、種々な事情が學業を全ふする事を許さないで、明治三十五年からは北海道に於て生活の爲め働かねばならぬ事になりました。

拙者の詩作は明治三十五年即ち拙者の二十二歳の時から北海道に於

て始められたのであります。それが明治四十年拙者が札幌で官吏になる迄は續きましたが、其後は殆ど全く作らなくなつたのであります。寧ろ作れなくなつたと申したいのであります。

拙者は本年二月病の爲轉地療養の官許を得て上京し、大久保の新居に落着くと同時に拙者の心は詩に向ひました。三月から四月にかけて五十余篇の詩が出來たのであります。此中四十一篇と舊稿百餘篇の中四十九篇を拔いて合せて九十篇を得、此詩集を刊行する事に致しました。拙者は四月末日を以て北海道の官吏たる身分を辭退する事となりましたから、今後事情の許す限專ら詩作に努めたいと思ひます。意義ある作物は今後に期したいのでありまして、此第一詩集は題名の示す如く、拙者の詩に復活した紀念に過ぎないのであります。

尙又よみがへりは拙者の永き基督教的信仰生活の動搖の中より、近時漸く確認し得た樣に思はるゝ光明と新作の春季なるを象徵したわけであります。

最後に拙者は一の疑問を現時の詩壇に提供したいと思ひます。夫は詩形の事であります。拙者は此集に新作として載せた全部は唯「櫻」の一篇を除いて五七音、七五音等の聯句による格調で通した事は拙者が曾て詩壇に流行した此格調に熟して居るからの事に過ぎないのでありますが、詩壇の諸賢が多く此詩形を顧みられない樣な現狀に付ては、何となく物足らなさを感じないでもないのであります。此格調は日本人に取りて因緣深い、捨て難い趣があるではありますま

す。

いか。

兎に角拙者の若い時の夢であつた拙者の第一詩集が、自分でも思ひがけない時に、誰人の世話にもならず、十年間自分で働いて得た金によつて出版されることは拙者に取て無上の喜悅であります。茲に拙者の信ずる獨一の神に感謝すると共に、拙者の過去三十六年の間物質的に精神的に恩惠を與へられたる幾多の親族知友先輩敎師學者の諸君に對しても、深厚なる謝意を表すべく此粗末なる製本の一部を進呈して更に御閲讀の光榮を得たいと思ひます。

大正六年五月五日　　向井夷希微　謹白

よみがへり目次

大久保にて（四十一篇）

月天心に……（以下大正六年三月作）……二
夜廻り……三
二階のあかり……四
春雨……六
曇り日……八
ビール……一〇
鉋屑……一二
飛行機……一四

異國……一六
くらげ……一八
庭の小草……二〇
桃は開きぬ……二一
喇叭……二四
煤びたる天井……二六
散歩……二九
錢湯……三二
家が建つ……三四
驛長……三六
猿廻し……三八

春の雪……四〇
草わかば……四二
（以下大正六年四月作）
古小袖……四四
南風……四五
障子の穴……四六
復活節一……四七
復活節二……四八
どぶ……四九
國家の爲に……五二
馬糞……五五
盥……五九

若葉は踊る……六三
おもひで
一、魚市場……六四
二、崖の上……六六
三、白きまさご……六七
四、かすみ……六八
五、とりごや……六九
蝦夷地の春……七〇
大虚空……七二
ベルレーヌより……七三
櫻……七五

杖……八八

北海道にて（四十九篇）

羌笛……（明治三十五年十一月根室にて）……八二
旭光……（明治三十六年一月）……八六
牧場の夕……（同　年二月）……八七
玄駒……（同　年七月）……八九
飄風嘆……（同　年十一月函館にて）……九三
獄裡の鐘……（明治三十七年一月）……九八
陶器師……（同　年三月）……一〇一
時ありて……（同　年五月）……一〇八

玉物語……（明治三十七年三月函館にて）…一〇九
後方羊蹄山……（同　四月）……一一一
巣くふ雀……（同　四月）……一一五
新月に與ふ……（同　四月）……一一九
翁ぞ畑に立ちてける……（同　五月）……一二三
燈火……（明治三十八年二月）……一二六
厭ひも果てぬ……（同　一月）……一二八
慘として二人……（同　二月）……一三〇
雪降る中を……（同　二月）……一三四
玻璃瓶の中に游げる
小鮒に代りて……（同　五月）……一三七

煙……（同　五月）……一三九
肖像畫……（同　五月）……一四〇
これや奇しき……（同　五月）……一四二
白百合……（同　五月）……一四三
苜蓿……（同　七月）……一四四
波の光……（同　七月）……一四六
待てども更に……（同　十月）……一四八
ふと消えし……（同　十一月）……一五二
干大根……（同　十一月）……一五四
門を出れば……（同　十一月）……一五六
窓をすかして……（同　十一月）……一五七

蜘蛛手に多き……（明治三十八年十一月函館にて）…一五八
落日……（同　年十一月）……一五九
夜寒……（明治三十九年一月）……一六二
暖爐のけむり……（同　年一月）……一六五
我が心……（同　年二月）……一六七
蓄音機……（同　年二月）……一六八
乞食萬平……（同　年二月）……一七〇
さまよひ……（同　年二月）……一七四
質屋の藏……（同　年二月）……一七四
火事……（同　年二月）……一八〇
雪どけ……（明治四十年三月）……一八五

遊女町……（同　年五月）……一八九
古壘……（同　年三月）……一九〇
故郷……（同　年五月）……一九二
役所……（同　年六月札幌にて）…一九四
ポプラ……（同　年七年）……一九八
群鴉の歌……（明治四十一年一月）……二〇二
雨が降る……（明治四十五年四月）……二〇七
屋根の雪……（大正二年一月）……二〇九
春の日……（大正四年五月）……二一四

以上（九十篇）

大久保にて

月天心に

磨かれし夜の空、
雨はれし後のかゞやき、
星こと〳〵く生きかへり
月天心に圓かなり。

風なぎて梅かほる。
かすかなる春のといきに
伴れてかなづる我が胸の
月天心に圓かなり。

夜廻り

靜かなる小路の夜ふけ、
あざやかに聽こゆる音は
遠方(をちかた)に汽車のとゞろき
夜廻りの拍子木の音。

暗黑の煙を吐きて
瀛車は過ぐ。過ぎし日の我が
暗黑の煙は消ゆる
夜廻りの拍子木の音。

二階のあかり

戸の中のかゞやくあかり
一列に戸の外にもれず、
家々は暗くもだせり。

獨り立つとある二階家。
二階には、障子のあかり
あか〳〵と照りこそ渡れ。
日にあらず、月にあらねど

この家の二階のあかり
このあたり照らして高し。
何ものかふしぎを見たる
心地にて我は仰ぎぬ、
二階家の二階のあかり。

春雨

しめやかに降りでし雨、
しめやかな春のおとづれ。
三月の日はかげるとも
しめやかな春のなつかし。

しめやかに降りでし雨、
しめやかな春のおとづれ。
朝霜のとがめにまして
しめやかな雨のなつかし。

しめやかに降りでし雨、
しめやかな春のおとづれ。
聖愛のにほひ油は
しめやかな雨と降りくる。

曇り日

日は曇る春のひととき、
子は眠る晝の靜けさ。
ものうげに時計は鳴りぬ、
只一つ時計は鳴りぬ。

手あぶりの火鉢の中に
ほんのりと火は燃えたり。
白灰の衣かつぎて
ほんのりと火は燃えたり。

日は曇る春のひととき、
子は眠る晝のしづけさ。
ぽつねんと見入る火鉢に
ほんのりと火は燃えたり。

ビール

圓形の卓子の上の
一盞のビールを前に
つく〴〵と眺めてあれば、
栗色のすきたる水に
生動の氣はたちのぼる。

生動の氣はたちのぼる
一盞のビールを執りて
徐ろに傾けぬれば、

そのかみの神のこらしめ
ひいやりと少し苦かり。

ひいやりと少し苦かる
一盞のビールをほして
いつしかに和らぐ心、
栗色のすきたる水に
あたゝかき神はいませり。

鉋屑

空家の庭に一團の
鉋屑は横はれり。
古家の手入に一日大工が來て
仕事をしたる名殘なり。

白ばらの花の如くに
鉋屑は渦を卷きて
一團とあきやの庭に横はれり。
荒れたる庭の赤土に。

きのふ終日雨ふりて
鉋屑は涙にぬれ、
風吹きて今日の寒さに鉋屑の
かよわき軀はをのゝけり、

空家の庭に一團の
鉋屑は横はれり。
隱忍と彼等は待てり革命の日、
渾身の血が燃ゆる時。

飛行機

そよ〳〵と東の風が吹いて居る
朝の空から、あたゝかい
しづかな呻りプロペラの
音がきこえる、プロペラの。

飛行機よ、飛行機があれ、飛行機と
空を見上げる、小供等は。
空に一點鳥の樣
飛んで行くなり、飛行機が。

飛んで行く、鳥の形の飛行機が、
飛んで行くなり鳥の樣。
ながい祈願の羽のして
飛んで行くなり春の空。

異　國

とある港の高みより
港入江を見てあれば、
港はかすむ春の海、
霞にうかぶ船の腹。

とある港の高みには、
異人の家のはれやかに
すつくと立てる春の空。
空は異人のまみの色。

胸はふくらむ春のいき、
異人のむすめ清らかに
白きおもてをあげて行く、
足の歩みのたよ〳〵と。

とある港の高みより
遠き異國の夢を見る
春のまひるはかゞやかに、
空は異人のまみの色。

くらげ

海にま近き一條の運河の上にかゝりたる
橋の上より見下せば、
橋の下なる混濁の綠の水はゆら〳〵と
海のうしほにたゞよへり。

かすかに澄める水面のたゞよふ波にゆら〳〵と
ゆらめき出でしたこくらげ、
水に透きたる傘を廣げつしめつゆら〳〵と
運河の水にたゞよへり。

水にたゞよふたこくらげ。たこの樣なる八本の
足をたゆらに動かして、
橋の下なる混濁の綠の水にゆら〳〵と
ゆらめき出でしたこくらげ。

橋の上よりじつと見る橋の下なるたこくらげ。
橋の上には春の風
春の衣をひるがへし、心のどかに行くか人。
橋の下なるたこくらげ。

庭の小草

庭の小草のみどり葉に
みだらな雨が打ちかゝる。

庭の小草のみどり葉は
みだらな雨にふるへてる。

庭の小草のみどり葉は
みだらな雨に生きて行く。

桃は開きぬ

ふと目をあげて眺むれば
桃は開きぬ、默として。
日かげもさゝぬ家のうちの
床の花瓶に投げざしの
桃は開きぬ、默として。

父の御手にめぐまれて
榮えし園は夢なれや。
蕾の枝の生きわかれ

母はいづこぞ、人買の
花屋の手より賣られ來て
こゝに佗しき日のいくつ。

春は匂へる青空を
仰ぐよしなき灰色の
壁に向へば、おのづから
花の心もしほれんに、
花は開きぬ、默として。

うすくれなゐの桃の花、

日かげもさゝぬ家のうちの
壁は冷たき灰色に
春を照らして花咲きぬ。
實を結ぶべきあてもなき
桃は開きぬ、默として。

喇叭

やゝ強き雨のおとなひ、
やゝ繁き雨の此頃、
うそ寒き春を佗びては
心ふと暗くたゞよふ。

まひる時近づきぬれど
雨の音やむともあらず、
暗き日のこのまゝ暮るゝ、
世の末のおそれを思ふ。

忽ちに響く喇叭よ、
すは主の日、みたまの聲か。
やゝ強き雨のおとなひ、
嚴かにふるゝ豆腐屋。

「わが子等よ、恐るゝなかれ」
主のみ聲かくと宣らしぬ、
豆腐屋の喇叭の音の
のどかなる調べの中に。

煤びたる天井

寢ねがての牀の中よりまじ〳〵と眺めてあれば、
煤びたる天井板の何事か語るが如し。
あやしげの木のみあしらひ、新らしき古き取りませ
たてられし此家の中の煤びたる天井の板。

煤びたる杉の板なみ、ふし穴のところ〴〵に
いにしへの命をしのび、横はる老木のむくろ。
ときはなる綠の森にあさづく日輝くあした、
夕づき夜めぐみの露のかゝりにし昔はゆきぬ。

杣、木挽、大工の腕にさいなまれ、人住む家の
天井に、せめて幸ある新生の玆に幾とせ。
屋根うらのやみに背きて人の居る疊の上を
默々と眺めてあれば、人の世の姿さま〴〵。

人は死に、人は生れぬ。人は食ひ、人は飲みけり。
人は笑み、人は怒れり。人は愛し、人は憎めり。
もろ〳〵の罪の行ひ、もろ〳〵の悶えのさまを
默々と眺めてあれば、いつしかに板は煤びぬ。

おなじ家の柱傾き、床板もくえし憂目に
家も見る流離の嘆き、家さらに移りてたちぬ。
煤びたる天井板は新らしき家に殘りて、
又も見る人のさま〳〵、人は行き人は來りぬ。

屋根うらのやみの中にし塵つるるそがひを延べて
安らげに腹ばふ板よ、何事をなれは思へる。
天井の板はどよめり。どろ〳〵と走るものゝけ。
ふし穴を洩れて落ちくるものゝけの糞のかたまり。

散　歩

「ぶら〳〵とあるいて歸る。」
「何を見てなれは歸れる。」
一さかなやにさかな並べり。
三錢と札が立ちたる
赤き身の切身もありき。」
「そのほかに何をか見たる。」

「肉屋には肉がかゝれり。
皮はげる牛の太股、
裸なる鳥もかゝれり。」

「はつはつは、ほかに何をか。」
「葬式の列をば見たり。」

「そはかなし、誰か死にたる。」
「そは誰か死にたるならむ。
我は見ず、死にたる人を。」

「はつはつは、何をなは見し。」
「我は見き、生きたる人を。
葬式の列の人々
美々しげに着物きかざり、
生々と生きて歩めり。」

「そは何の皮肉なるぞや。」
「そは何も皮肉にあらず、
まのあたりあるいて見たる
春の日のまちの樣なり。」

錢湯

今し我裸になりて
長々と手足を延ばし、
畫すぎの人のこまざる
錢湯の湯ぶねの中に
ゆつたりとからだを浸たす。

人參のかすかなかをり
心地よく鼻をそゝりて、
紫の水のなめらに

とけて行く我がたましひは
紫の湯氣とのぼりぬ。

今し我裸になりて
長々と手足をのばし、
畫すぎの人のこまざる
錢湯の湯ぶねの中に
ゆつたりとからだを浸たす。

家が建つ

家が建つ春の日。
あちこちに
家がたつ。

郊外の麥畠。
隣にも
家が建つ。

身輕なる大工さん。

光る斧。
光る鋸。

なめらかな鉋の音。
鳴くひばり。
木のかをり。

家がたつ春の日。

驛長

電車が通る小驛に、
正直さうな驛長の
年は寄りたり顔の皺。

電車が通るたび毎に、
赤い帽子の驛長は
ひとりで廻す信號機。

電車が通る山の手の

レールに春の日がてらす。
赤い帽子に日がてらす。

猿廻し

あき地に春の草萠えぬ。
あき地の隅に猿廻し
煤けた顔をさらしつゝ
猿を廻してあぐらくむ。

猿は着けたり晴衣裳。
はでな袂をひるがへし、
何やら歌ふ歌聲に
つれて足取る足拍子。

古き鼓はぽんと鳴る。
つゝみの横に猿廻し
ひなびた聲を響かして
人のめぐみを求めけり。

草にころがるあかゞねの
せにを捨へば、びつたりと
猿は地べたにうづくまる。
猿のお尻は空さして。

春の雪

晴れたる晝にひきかへて
曇れるよべを氣づかひぬ。
夏のものなる稻妻の
またゝく光まがごとの
起るしらせに輝きし。

けさ見る雨のしく〳〵と
泣きて涙は氷りけり。
天の無情か、風寒く

冬のものなる雪がふる。
春の三月、彼岸すぎ。

つぶやくなかれ兄弟よ。
あれ見よ、雪がとけてゆく。
みぞれはいつか雨となり、
雨にさし來ぬ日の光。
雨はあがれり日の光。

草わかば

土手の芝生による二人。
土手の芝生は枯れてけり。
枯れたる中に萠え出でし
土手の芝生の草わかば。
若き二人の草わかば。

土手の芝生による二人。
通ふまなざし、通ふいき、
通ふ命は手より手に

つきぬ思を語るらむ。
思はもゆる草わかば。

古小袖

一室の壁にかゝつてる
脱いだ着物のうしろ向。
脱いだ着物は我が着物、
うしろ姿は我が姿。

見れば見る程此の着物
おれの姿にそつくりだ。
おれのむくろか、たましひか、
うしろ向いてる古小袖。

南風

ぼや〳〵と南風。
ぼや〳〵と我が心。
かすかなる悲みや、
あてもなき戀心。

あだめける書あけし
文机のかたへには
桃の花しなびたり。
ぼや〳〵と南風。

障子の穴

又あきぬ、障子に穴が。
だらしなき穴のありさま、
はた〳〵と風にふるえて
破れたる紙のかなしみ。

いくたびか紙の張りかへ
さま〳〵に穴をつくらう。
しかすがに破るゝ障子、
破れたる紙のかなしみ。

復活節一

櫻は咲けり我が胸に。
震わたれり我が胸に。
鐘はのどかに鳴り出でゝ
主はよみがへる我が胸に。

風は巷を吹くとても、
塵は巷にあがるとも、
日はうら〳〵と我が胸に
すくひの主こそよみがへれ。

復活節二

石は轉げぬ墓場より。
石は轉げぬ罪人の
むくろを置きし墓場より。
墓場の口の大石は。

石は轉げぬ墓場より。
墓に尋ねよ罪の人。
墓にはあらず神の人。
かゞやく春のよみがへり。

どぶ

青くかゞやく空の下
どぶはよどめり灰色に。
石の堤にかこはれて
どぶは流れぬ冷やかに。

あぐる波なきどぶの水。
あぐる聲なきどぶの水。
いつか集まるごみくたに
せかれてのろきどぶの水。

ところ〳〵に一團の
緑の苔はうかびたり。
春の光にてりかへす
どぶの匂はあたゝく。

夕べとなれば空はまた
どぶに近づくどぶの色。
濁りし水も見え分かず、
緑の苔も眠るめり。

獨り殘れるどぶの香の
かをり微かに踊りつゝ、
春の夕べの一ふしを
どぶの蛙のかなでけり。

國家の爲に

「諸君よ」と辨士はさけぶ。演壇の
卓の上なる櫻花あてにかゞやく
電燈のもとに、こぶしを振り廻し
辨士は叫ぶ何事か「國家の爲に」。

「諸君よ」と辨士は叫ぶ。「諸君よ」と
辨士はあげぬ水さしを。辨士はつぎぬ
なみ〳〵と、コップに水は充ちてけり。
辨士はぐつと水を呑む、「國家の爲に」。

「諸君よ」と辨士は叫ぶ。滿場の
諸君はひねる髭の先。國家の爲に
拍手する人もあるなり。春の夜の
芝居にあらぬ政談は「國家の爲に」。

忽ちに立てる壯漢飛び上がり、
壇の上なる辨士をばむづと握みて
打ちあぐるこぶしは何の爲なるか。
彼は叫びぬ聲あらく「國家の爲に」。

「すは珍事」どよめき渡る劇場に
劍鞘光り、臨監の警察官は
いち早くしばりあげたり暴漢を。
職務執行これやこの「國家の爲に」。

馬糞

それの御苑に櫻のうたげ張らるゝよき日なり。
いともよき日のよき日なり。
御苑の門にいかめしき人は立ちけり。
勳章の數燦然と光りたる
騎馬の士官の往來さへいときらびやかにもの〳〵し。

今日しも此處に招かれし貴顯のやから
はれ〳〵と馬車に自動車いさましく、
花のいでたち麗はしきたわやぐ人も打ちのせて

大路を狹くつどひ來ぬ。

大路のわきに居列べるいやしき民のやからあり。
多くは女小供なるまづしき裝ひとり〳〵に、
顏もかたちもとり〳〵に、
いとも醜きそのやから。

やがて至尊の二方の鹵簿の近づく時なりき。
鹵簿の拜觀こひねがひつどふ卑しき此のやから、
ひしめき紊る途筋の秩序を保つ
警官のひまなきつとめ。

更に見よ、電車、荷車、人もまた
とゞめられたる鹵簿の途、
途に落ちたる馬糞を
一つ一つに拾ひとる人のありけり。

見よや見よ。水は撒かれつ鹵簿の途。
塵はとゞめず鹵簿の途。
ひとりいやしきやから人
醜き姿さらしつゝ途のかたへに堵をせり。
誰か來りて捨てざるや、馬の糞なる此のやから。

至仁の君はしづ〳〵と鹵簿を進めて近づきぬ。
至仁の君はあはれみの清き眸を
途ばたのいやしき群に注ぎけり。
至仁の君は一たびも水の撒かれし途を見ず、
塵を止めぬ途を見ず。
鹵簿は御苑の門を入る。

盥

洗濯日、洗濯ものは
にこやかに竿にかゝれり。
まん圓き口を開きて、
大盥腹も空しく
椽先に午睡なしけり。

人の着て人の汚しゝ
もろ〳〵の衣を受けて
もろ〳〵のけがれを濯ぐ

大盥あがなひぬしか、
圓滿の神のみすがた。

人の着るもののみならず、
生れくるあか兒を洗ひ、
死にて行く人をも洗ふ
大盥大いなるかな、
もろ人の生命にあづかる。

しかばねとあか兒のみかは、
ゆあみする人をうけ入る

大盥は夏のめぐみ。
男また女のはだか
皆知りぬ、隱し所も。

人の世の快樂のけがれ
罪の血のよどめる匂ひ、
辛勞のなやみの汗も、
あかつける著物と共に
大盥洗ひきよめぬ。

洗濯日、洗濯ものは

にこやかに竿にかゝれり。
まん圓き口を開きて
大盥椽に坐睡る
圓滿の御相を拜す。

若葉は踊る

若葉は踊る春の空。
若葉は歌ふ春の空。
空にわたれる鐵線(ピアノがれ)の
譜表の中に鳴る若葉。

椽にころりと轉がりて
ひとり眺むる春の空。
春は光れるたゞ中を
白い白雲飛んで行く。

おもひで

一、魚市場

さかな市場の爽けき
朝に見出でし君なりき。
さかな市場にわだつみの
色のいろくづ輝きて、
うしほと寄する人波の
中に見出でし君なりき。
思へば遠きそのかみの

春のうしほの幾かへり、
さかな市場のいや榮え
今も輝くいろくづの
中に空しく尋ねわび
尋ねわびけり我が戀を。

二、崖の上

崖の上なる彼の家に
移りし日なり、あゝ其日。
崖の下なるかの家に
鳴りし琴のね、あゝ其音。

崖の上より知りそめし
ながき惱みの起き伏しに、
崖の下なる琴のねの
絶えては又も響くなり。

三、白きまさご

白きまさごの廣がりて
濃青の海を抱きけり。
綠の松の枝垂れて
若き惱みをかくしけり。

波打際にあか〳〵と
あからひく子は歩みくる。
若きなやみのあか〳〵と
かゞやき出でしかの渚。

四、かすみ

かすかにかゝるこすゞめを
あぶりてたべしそのむかし。
いとにたぐりしこざかなを
からすにやりしそのむかし。

こゝろにかゝるこすゞめの
なくねあはれむひねもすや。
むねにたぐりしこざかなの
いのちをかばふよすがらや。

五、とりごや

とりごやに　ひよつこかへり、
とりごやの　よこにつどひて
をさなどち　たはけきあそび。
（わかきひをおもへばたのし。）

あらむしろ　ひろげしうへに、
やはらかき　はだをあらはに
あほむきし　をんなともだち。
（わかきひをおもへばかなし。）

蝦夷地の春

鯡は煮らる釜の中。
釜にみなぎる魚油(うをあぶら)。
油は匂ふ春の濱。

鯡はかゝる沖の網。
沖にむらがる鴎鳥(かもめどり)。
かもめは舞へり春の空。

鯡を運ぶ船の數。

船にひらめく旗じるし。
旗はかゞやく春の海。

大虚空

こよひも仰ぐ大虚空。
星のきらめく大み空。
生れてこゝに幾千たび
仰ぎ見たりし大虚空。

何れの星につながれし
己がいのちか知らねども、
何れの星もこゝろよく
我にまたゝく大虚空。

ベルレーヌより

屋根の上には大空の
安らに青く横はる、
屋根の上なる梢には
緑の若葉そよぐなる。

鳴るやみ寺の鐘のねの
風なき空にのぼりゆく。
鳴くや雲雀の歌高く
のどけき曲をふるはしぬ。

あゝ安らけきものすべて、
あゝ静かなる人の世や。
蜂のなくねの微かなる
音は流るゝ巷より。

そこなる人よいかなれば
長き涙にむせぶらむ、
若きいのちの春の日に
いかで涙にむせぶらむ。

櫻

櫻、櫻、櫻が咲いた。
櫻は昔ながらの姿に咲いてる。
白い花、うす赤い花、小さい花。
何といふ貧弱な花。
枝を集め樹を集めて
漸くそれが何等かの強みを見せて居る。
櫻、櫻、おまへは民主黨であるのか。

櫻、櫻、櫻が咲いた。

櫻を見に來た人達、
貴族か、平民か。
貴族もある、平民もある。
平民の娘よ、妻よ、
おまへ等の生活が花見の餘裕をもつてるとは
まことに祝すべき事ではないか。

櫻、櫻、櫻が咲いた。
一本の櫻の樹の下で
おれは一基の石臺を見つけた。
腰をおろして徐ろにおれは眺めた、

右に左に、前を過ぎ行く女達を、
おれの目を眩惑せしめる色彩の所有者を。
此強烈な色にくるまれた人間は
もとより人間の中の弱き者である。
さりながらおれの驚き、おれの悲しみ、
何とした貧弱なからだのもちぬしよ。
あまりにあまりに貧弱なからだ。
こつてりと塗つた白粉の下に
痩せこけた顏がのぞいてる。
むやみに廣げた頭髪を支へるには
あまりに短かい身の丈。

燦然として光る貴金屬と寶石とは
營養不良者の腕を照らして居る。
白日の幽靈。
これらの幽靈がばた〳〵と
塵を揚げて行くのだ。

櫻、櫻、櫻が咲いた。
おれは目を頭上の櫻にうつした。
櫻は謙遜に咲いて居る。
櫻は白にまがふばかりの薄赤い色に咲いてゐる。
櫻はもとより小さい花である。

小さい花は一つ一つに充實した姿をもつてる。
之が數箇一團をなして枝の先についてゐる。
枝は枝と相交つて
無數に寄つて一つの幹を成して居る。
櫻の花は何等の特色を誇る事なしに
大きな一團を成して居る。
大きな一團の花はつゝましく咲いて居る。
春は四月、晴れわたりたる青空の下に
人間の塵をかぶつて咲いて居る。

杖

杖はころびぬ此途に、
我は行くなり此途を。
たれにきけども皆知らず、
我も知らざる途なれど。

エホバは天にましませり。

北海道にて

羌笛

郊原草は枯れぬ、
小丘人もあらず、
暮秋の空に雲は迷ひ、
蕭條として夕日沈む。

北海波は黑く、
岩礁冥府の色あり、
双眸映すところ
寂寥また加はる。

小丘に登りて
詩人歩み遲々たり。

黄昏いつか闇に移りて、
星斗は高き空の上
劫初の光洩らしそめ、
短檠小舍に今照りて、
近郊灯影三つ二つ。

今宵アイヌ笛を吹く、
哀音高く又低く

夕べの風に野をめぐり、
野調響は遠く
詩人の耳に入る。

悽然悲み極まり
泣かんと欲して聲出でず、
血涙瞼を染めんとして
倏忽風に拂はる。

愴然魂は死して
蹣跚地に倒る。

斷腸の嘆きは
いかで人知らむ。

羌笛ひとり猶止まず、
哀音高く又低く
夕べの風に野をめぐる。

旭光

冷たき花に埋もれて
浮世は闇に眠りけり。
淋しき夢をさまさんと
光は生まるひんがしに。

花は色めきそめにけり。
白き衣はかゞやきて
きたなき骸掩へども、
光は知れり僞りと。

牧場の夕

牧場もる里の子等
遠く遊びて未だ歸らず、
日はくれぬ、月出でぬ、
春の野の邊に霞こめたり。

詩に渴き歌に飢えたる
若き人世に捨てられて、
今、一人孤影を見んとて
夕暮の星を數へぬ。

救世の君も天降り來ずとか、
み空には異象なし。
望に離れ力なえたり、
空しくやまた歸らむ。

玄駒

何處より驅けり來にけむ、
何處にか進み行くらむ、
あやしやな己が夢路に
ひた黑き駒の現出。

磨墨かそれも及ばず、
名づけんに何に比へん、
たてがみの躍る雄々しさ、
風に飛ぶ勇ましの尾や。

混沌の闇をも照らす
双の眼の光くすしく、
天か地か雲あるところ
塵を揚げはしる其駒。

歸いまゝ瞬くひまに
數千里の道を越したり。
忽ちに我は馬上に
見わたせば星のいろ〳〵。

遠しとは往昔の思ひ、
近つきぬ、また近つきぬ。
光輝ありと見しは迷か、
趣もあらぬ土塊。

過ぎ去りて又も望の
きら玉にかがやく國か、
目にも見て走る玄駒、
近つけばそれもつちくれ。

幾億里みちは遙けし、

遙けくも駒は疲れず、
猶も亦一つの方に
進むなり、驅けり行くなり。

乘り廻す力に倦めど、
止めんに手綱はあらず、
降りんには餘り恐ろし、
術もなく牽かれ行き行く。

飄風嘆

二つ光明の父母と
世を我がものに誇れども、
同じ道より歩み得ぬ
哀れ能なき月日よな。

友の多きを頼みつゝ
高きに獨り微笑むも、
幾何のものか動き得む、
哀れつたなき星數よ。

「自由の力我にこそ、
見よや」とばかり飛び交ふも、
地を打つ雨のなど弱き、
哀れ女々しき雲の群。

心にかくと嘲りて、
奇もなくふりし天地の
懶き夢をさましつゝ、
我大空に萬有を
打ち靡けんと謀りたり。

ひそかに時を窺ひて
夜の間に擧げし兵の
荒ぶる勢に敵はなく、
上なる雲は逃げ惑ひ、
下なる水はどよめきぬ。

百年ほこる松栢を
根こぎに倒し、知慧ありと
さかしらぶれる人々の
高き住家も破りては、

誰かは我を怖れざる。

手はじめ良しと喜びて
星月闇にとざしつゝ、
昇らむ日をも防がんと
軍勢配りしかひもなく、
哀れ我が脚起たざりき。

心ばかりはあせりしも
爲んすべ知らに、曉の
敵を背後に退きて

しばしは望絶えにけり。

世はまた同じ日を仰ぎ、
變らぬ月をいつくしみ、
星をあはれと歌にして、
浮べる雲に舞はんとす。

獄裡の鐘

車にぎはふ八ちまたの
大路は遠く離れたり、
あや織る衣に身を飾る
世のあて人は避けてけり。

ひとり爲すなき命もて
いつ迄人に食まむ身ぞ。
火桶には火のうすらぎて
思ひ淋しき夕まぐれ、

風も凍れる大空に
ゆるき歩みを運ばせて、
彼方廓の嚴めしき
獄裡の鐘の響くなり。

肉慾に渇きし罪人に、
一日の勞役を今措きて
夕べの食につどへとて、
獄裡の鐘の響くなり。

こなた聖者の遺したる
法の御殿に人招ばふ
朝の聲に似もやらで、
そはかはりたる響よな。

さはれ思へばそれとても、
のぞみ單へに生くるなる
おほくの笑顔誘ひてぞ、
獄裡の鐘の響くなる。

慰安を神に求めんと

法のみ殿に昇るとも、
此處にも罪の跡絶えで、
浮世の勞役に充てるなり。

自然なる神わざの
獄裡に我もつながれて、
夕べはなだき遠しとか
祝福の鐘の聞くに聞かれず。

陶器師

陶器師嘆く樣、
我が住家にと思ひつゝ、
手づから揑ねて火に燒きて、
かく出で來し壺一つ。

身を容れんには足りしかど、
せめては家の外飾もとて、
千々の色ある彩筆に
ゑがきなしたり山や水。

此處に棲まする生き物の
類もやがて竭したり、
一きは榮の飾りにと
副へしは女男の人二人。

壺は見事に出來上り、
我は心を安んじて
中に寢所をかまへつゝ
ゆたかに潛み隱れけり。

時にあやしきさゝやきの

外面の方に聞えけり。
耳をすませば我が筆の
女男の二人の語るなり。

我が手末の技巧をば
あげつらふなる其樣を、
我は心にとめもせず
ゆたかに潜み隱れけり。

さるに又もや彼の二人
怨み顏にもつぶやきぬ、

いかに知りけむ我が住まう
安きふしどに入らぬ身を。

己が分をも知らぬ身の
愚痴を獨り笑ひつゝ、
我は心にとめもせず
ゆたかに潜み隱れけり。

今度はいかに泣き叫び
我に求むる如くなり、
はては咒ふか罵詈の

聽くにえ堪えぬ聲もする。

かすかに首をもたげつゝ
外面の樣を窺へば、
あはれ色ある我が筆の
跟は班らに汚れたり。

こはさて何と爲んものぞ、
益なき者を畫きそえて
かくも内外に仇さるゝ
我は知慧なき工人なり。

黑く塗らんも見榮えなく、
まして割らんは尙惜しゝ、
まゝよ眼は内にあり
耳を塞ぎて潛まばや。

時ありて

時ありて我海山に
み空も狹く慊らず。
思へば何時か長ふとなく
窮りもなき心かな。

さもあらばあれ市にわれ
軒より低き丈を恥づ。
思へば長ひしものながら
六尺に足らぬ身なりけり。

玉物語

一人がもてる玉一つ
玉屋の腕に磨かれて
光まばゆく、晝も夜も
床の眞中に置かれけり。

一人がもてる玉一つ
山より出でゝさながらの
玉とも見えず、玉くしげ
蓋を被りて秘められぬ。

彼方一人が言ひけるは、
たま〳〵得てし珍の玉
光を示す由もなく
秘すは無きに似たらずや。

此方一人が言ひけるは、
光らばやがて曇りなむ、
曇らば又も磨かれて
何時か玉なく成りはてむ。

後方羊蹄山

あらびし嵐おさまりて
吹雪するみ冬はつきぬ。
咆りし浪の静まりて
北の海霞にけぶる。
春の大空つと撫でゝ
巨き人こゝに臨めり。

見よや氷の衣には
照れる日の光まばゆく

かゞやき亘る其の姿、
天降り來て立たせる神か、
あな叢雲の御簾まきて
世を治らす皇帝か。

思へ惱みの痛き日は
一歳の半ばつゞきて、
殘る半ばも幾干かは
朝ら日の慰籍あらむ、
頸を高くもたぐれば
嫉しみに敵こそ寄すれ。

今ほゝえみの面には
唯光榮の色見ゆらめど、
知らずや今ぞ凄じき
戰鬪に負傷の名殘、
忍耐の祝福今ありて
深か沈默それぞ凱歌。

八洲の外の蝦夷が島、
大船に煙たゝして
我が越えて行く後志の

沖べより陸見さくれば、
あな莊嚴にそゝり立つ
島つ富士後方羊蹄山や。

巣くふ小雀

ぬるき光に誘はれて
そと下り立ちし庭の面、
垣根の花にひと時の
我も憂は忘れけり。

夢見心地のまなこをば、
ちよと鳴くなる小雀の
聲に見開き眺むれば、
軒を離るゝ影二つ。

鶯かさしと身を寄せて
かくれながらに覗へば、
やがて歸りし其の一つ
羽毛を銜へてたゆたひぬ

あたりに伽も見えぬとや、
ずばやく入りし新巣屋、
後に亦來し其の一つ
稭を銜へてたゆたひぬ。

暫時は内に入りもせず、
何に心のおかるゝか、
ゆゝしき樣に首ふりて
寂しく外をまもるなり。

嘘こはいかに情なき
浮世のさまを見つるかな、
のどけき春にあさましき
畏怖の影をまのあたり。

嘘小雀よいかなれば

人里遠くさかりたる
安き林を占めもせず、
かゝる軒端を撰みしか。

さても天命のちぎりとや、
ぬすむが如く忍びつゝ
此處に巣くはん汝が曹の
すべなさにしも似たる我かな。

新月に與ふ

たそがれの匂ひゆかしみ
春野われとめて來にしが、
ゆくりなく西のみ空に
仰ぎ見し汝にあるかも。

大海かか深き天の
水底を忍び出でつゝ、
かぎろひの夕べの靄に
浮びにし奇しき眞珠。

珠ならばむしろ妙なる
瑪瑙もて成れる勾玉
ほの赤き色うすさびて
皇帝の寶に似たり。

めづらしき光はほかに
比へんに、夢より醒めて
曉の風に吹かるゝ
美女の目にも若かなむ。

さよ更けていつか我が見し
ありし夜の影に變りて、
さても汝がきよらの姿
今生れしみどり兒にかも。

さなり汝は新たなるもの
生命こそ更に運らめ、
祝福の神手に養はれて
育ち行く力に充てり。

宵闇の惑ひありきは

永き我がさだめなりしが、
冷やけき夢に慣れては
汝を見む願もなかりき。

よしゑやしねぎはありとも
いつとかは時を待ためや、
待たなくに縁はこよひ
なつかしき汝を見るかも。

翁ぞ畑に立ちてける

休息の冬は過ぎてけり、
雪にまかせし荒畑の
雪は光に消えうすれ、
うすれて終に失せつれば、
あした霞ともろ共に
翁ぞ畑に立ちてける。

所々に數萠えし
綠若草はえあるも

眺めて思ふ爲ならず、
幾多の年を慣れ來つる
つとめの季と知るからに、
翁ぞ畑に立ちてける。

そは幾十畝か知らねども、
狹くもあらぬ荒畑を
はしより徐に耕すと、
永き春日をくるゝ迄
くろがね重き鍬執りて
翁ぞ畑に立ちてける。

翁よき子をもちてけり、
翁よき孫もちてけり、
孫は學びの庭に、子は
彼方の畑にいそしめど、
古稀の齡に鬚白き
翁も畑に立ちてける。

燈火

たそがれや、誰にかも
物思ふ我が小暗室に、
ものゝけなして
つと入りつ、つと出でつ。

亂れたり我が思、
ふたゝびは結ばへなくに、
そと開きぬる
眼に入りし燈火や。

ほや透きて青き火の
音もなく燃ゆるを見れば、
何とはなしの
めづらしさ、なぐさめや。

ふと醒めしまたの夢
小さき火のあきたらず、
そと手をのべて
ともしをぞかゝげぬる。

厭ひも果てぬ

厭ひもはてぬ世にあれば
眞晝は業務にまぎるめり、
やくなき夜半を敷妙の
枕に夢は誘へども、
結びもえせず、咒はれの
若き憂愁を胸に知る。

わづらひ肉の身にあらば
あやなき闇の夜深けても

醫師を招ばん術もあれ、
今宵襲ひしさびしさの
病ましめてける心には
迎ふ人なき恨かな。

慘として二人

慘として二人かたみに語なく、
ゆらげる燭の光にたゞ映えて、
涙ぞ白くまぶたを轉ふなる。
冬なり、夜なり、戸外は凍りたり、
爐にある炭のひとりし燃えたちて
二人が顔をひそかに覗ひぬ。

慘として二人つく息いたましく
あてなき戀のなげきにさも似たり。

若きに夫を失ひ、幼くて
父をとられし幸なき母と子の
男子が年は春いま去なんとし、
女が秋は正しく半ばなり。

慘として二人愁ひにうなだれぬ。
母なる一人むかしの惱みこそ
子の望にも忘れてありしなれ、
生ひ立ちて今悶えは新らしく
頼める人の心を亂りては、
小やすみもなき悲嘆に入りぬゝし。

慘として二人碎けし玉を泣く。
夜は淺くとも冬こそ深ければ
淋しき土に再び求め得ず、
待つに男子が春今去なんとし、
落ち散る花の恨を葉も共に
女が秋はまさしく半ばなり。

慘として二人のかたみに語なく、
ゆらげる燭の光に唯映えて
涙ぞ白くまぶたを轉ぶなる。

冬なり、夜なり、戸外は氷りたり、
爐にある炭の獨し燃えたちて
二人が顏をひそかに覗ひぬ。

雪降る中を

そは彼の花に吹かれて漂ひて
春に酔ひしるたはれの影ならず、
喧騒と罪を戸の内とざし置き
あまねき淨め巷の塵を掩ふ
雪ふる中を、たそがれ行く君の
淋しき姿望むに興ありな。

あらしの荒ぶ厄日の今日ならね
いたきは風の身にしむ冬ふけて

ある時艶の傘さしもえず、
あやなき被物匂を埋むれば、
君優れたる容も今何か
色故またもゆかしと見られめや。

榮なの日影朧にくれそめて、
軒なるともし微かにほのめける
大路のゆきゝしばしの途絶をば
繼げるは一人あえかの君なれど、
大片小片煙と雪はこめ、
それとも分かず夢見る心地こそすれ。

瞬きもせず行衛を見送るに
淡くも浮ぶ寂びたる其姿、
すさめる空を背負ひて立つに似て
此處にぞふさふ司の女神にか、
思は惑ふこはげにまぼろしの
君しも途に消え、日は暮れはてぬ。

玻璃瓶の中に游げる小鮒に代りて

くゞもる水の籠り沼に
孵りしまゝの我が曹は、
我が世の廣き狹きをも
知らで過ぎ來し方もあり。

今捕はれの瓶の中
あまねき光示されつ
さてもはてなき影を見て

廣きにまなこくらみしが、
しづかに鮨を動かして
游ぐとすれば、こはいかに
限りは近く身をとゞめ、
狹きを鼻に知りてけり。

四方の志は空なれや、
せめては瓶の高さをば
よすがに浮きつ沈みつゝ、
もとの沼をし戀ふるかな。

煙

思ひくらし
思ひくらして高樓に
たそがれ近く風もなき
巷の空を眺むれば、
けむ吐く筒の長きより
煙はたちも昇らずて、
沈みて低くけぶるなり。

肖像畫

もの皆移りかはる世に
變らぬ物を戀ふるとて、
肖像畫は求め得ぬ。

君手弱女の現身は
もとより變るはかなさに
けがれも罪も包まめど、
變らぬほこり君を唯

藝術は永き一葉の
おもかげの畫に偲ぶべく。

これや奇しき

現(うつ)にあまる我が戀の
破れて泣きしそのかみは、
霞に消ゆる遠海の
かすけき夢となりてけり。

これや奇(くす)しき迷はしの
よべうかびにし人の影、
むかしながらの其の媚びに
あゝ夢ならぬ亂れ心地や。

白百合

白百合の花愛づるとて
花をし折るは妨げず、
唯心ある君ならば
白き其根な貪りぞ。

苜蓿

林に森に山は皆
その色なれや、濃緑の。
此處にも野も狹、牧の子が
牛追ふ足をまもるとて
三つ葉やさしき茂らひに
苜蓿花つけぬ。

榮えの夏の日にあれば
弱き者なし地の上、

幼な少女が病める女の
たわやぐ花に似もやらず、
うすくれなゐの苜蓿
花圓く肥えてけり。

身は草に寢てはて知らず。
花はむらがる右左、
しめりは草ともろともに
からびし胸を養へば、
希望に我も肥ゆるめり、
苜蓿花圓し。

波の光

燒けたる空の名殘今
汐氣にけぶる霧となり
朧に遠き海の彼方。

靜かに近く眺むるに、
か黑き波の畦の上
くしき光の閃きぬ。

火花の如くいち早く

數はさしそふ其の光、
やがて失せけり波の底。

またも高まる波の上、
光はさらにきらめきて
眩ゆきばかり擴ごりぬ。

消えては又も燃え出でゝ
絶ゆる事なき其の光、
波にやどれる空の月。

待てども更に

待てども更に開かれず、
敲くに倦みし拳かな。
夕べはかくて迫りしに、
樞戸すきしほの影の
光と雪に偲ばれて、
待てども更に開かれず。

二夜はかくて明けにけり。
飢えたる腹を道のべの

名もなき草に癒しては、
あゝ又敲くくるる戸に
きしる響は聞かずして
中にかすけき物の音。

ふと迷ひ出し荒野路に
からくも此處は尋ね得ぬ。
主ある樣に見えながら
開かれもせぬ樞戸の
あやしき影を敲きては、
叫ぶに喉もかれにけり。

行衛も分かぬ荒野路に
運ばん足は疲れたり。
此處に叫びて樞戸の
よしや永久(とこしへ)に開かれず、
拳は終にくつるとも
待つより外に術はなし。
草まを分けて流れ行く
水に餓きをとゞめては、
あゝ又殿くくるゝ戸に

今宵の闇は迫り來ぬ、
待てども更に開かれず
殿くに倦みし拳かな。

ふと消えし

ふと消えし圍爐裡火や、
炭つきて灰のみ白し、
戸はあれど壁はあれども
此の室の唯寒し。

ふと消えし燈火や、
油つき芯のみ長し、
玻璃のほや白き石笠
さながらに唯暗し。

ふと消えしたましひや、
血はかれて骨のみかたし、
よしや名の、よしやいさをの
殘るとも唯悲し。

干大根

町を行けば
干大根軒端にかゝり
村を行けば
干大根木末にかゝり、
冬ぞ來ぬる。

よしや日は
軒端に薄くとも、
よしや葉は

木末に竭きぬとも、
冬ぞ尙世の末ならぬ。

來ん年に
ありの備へや、
來ん年の
ありの望みや、
干大根白くかゝれり。

門を出れば

門を出れば風寒く
歩むにつれて打たるゝよ、
左の頰や右の頰。

門をし入れば身はたゆく
思ふにつれて責めらるゝ、
過ぎにし負債、來ん義務。

窓をすかして

窓を透かして上見れば、
寒げに雲の往來する。

窓をすかして下見れば、
寒げに人も往來する。

蜘蛛手に多き

蜘蛛手に多き道なれば、
蜘蛛手に人も分れ行く。
一つ港に
數多船はて、
下りしは同じ埠頭より
蜘蛛手に人ぞ分れ行く。

落日

幾年のわづらひに
幾年のなやみを負ひて、
人ぞ今ふしどに呻く。
骨だてる青きおもてに
亂れたりむらひげの。

うすものゝ窓かけの
日を掩ひ小暗きこの室、
さびしげに人の臥せりて

うれたげに人ぞ看護れる。
今西に日は低く。

水薬粉薬
あゝ雷にがしと退けて
牛の乳汁、鷄のあつもの
うま酒も今は厭きぬと、
病人ぞ只呻く。

金色の背を向けて
書の數默然たりや、

「あゝ汝も、さなり用なし、
人の愛、うから友垣、
さらば」とか病人の。

いやはての之ぞ願望、
「殘る目に殘る光を」
窓かけは今しまかれて
日ぞ赤しつひのふしどに、
つかの間よ、永遠よ。

夜寒

ふけ初めし夜の寒さに
二人して炬燵をいだく、
つれづれかそれのみならぬ
物ほしき喉やもろとも。

夜あきうど戸外に高き
ふれ聲やあまきいざなひ、
「蕎麥やそば」「鍋やきうどん」
「甘酒」に「お稲荷さん」に。

貧しさのせん方あらず、
わりなしや何のたしなみ
黒髪の亂れしかごと
我妹子ぞ我を責めける。

苦笑ひ靜に立ちて
窓かけをかゝげて見れば、
蕎麥やの灯寒げに赤く
雪白しそともの巷。

せはしげに折々通ふ
下駄きしむ人の足音、
振れ賣の叫はつれて
冬の夜の靜寂を破る。

暖爐のけむり

ま向ふ家の横腹を
貫き出でし煙だし、
折れては圓き其筒の
直ぐにみ空を指して立つ。
戴く笠の横管や、
口こそ開け右左。

昨日けむりは一つより、
今日また他の一つより、

時に二つをもろともに
みなぎり出づる樣見よや、
行衞は何處屋根の上
風に吹かれて空に消ゆ。

我が心

我が心池のま清水、
かりそめの塵の落ち來は
すてさるに何のたゆたひ、
そと取りて水を清めむ。

我が心池のま清水、
內深く底にかくれて
ともすれば濁りを立つる
坭土(ひぢつち)ぞたゞに憎けれ。

蓄音機

しのびかに宵のまあるき、
つと過ぎし町の小通り
時計屋の前にかゝりて
訝りぬ人のつどひを。
時は今寒の夜道に
など悠の人のふるまひ。
忽ちに解けしうたがひ
故しらず我もとまりぬ。

好き身なり、あしきいでたち、
老い、若き、男女の
人堵に内こそ見えね
蓄音機歌ふなりけり。

時計屋の時計を見るに
いそぎ身のさてしもあれず、
足ばやに群を離れて
殘り氣にかへり見すれば、
人は往き人は來りて
時計屋の前にとまりぬ。

乞食萬平

丘の上の祠のわきに
藁小屋さても舊りたり。
東風そよぐ春よりかけて
吹雲する冬を幾度
年永く人も住まひつ、
そは乞食其名萬平。

日は出でゝ丘を下りて
物乞に市街へと辿る

萬平の面を見よや。
今日も亦望みや新た、
其眼夢とあこがれ
鼻歌のふしぞをかしき。

ぼろつゞれ厚く着込みて、
雪道にそなへの甲ひ
古毛布幾重も卷きて
草鞋がけこちたき足や、
手に長き箸の二もと、
背負ひたりアンペラ叺。

慣れつれば犬さへ吠えず、
吉例のわらべの囃し
にこにこに彼は受けつゝ、
出張先寺の門への
往還り巷にあさる
芥箱の中をあちこち。

二本の箸のはたらき
アンペラの叺を肥やし、
たそがれて丘を上るに

萬平の思や足れる、
そのまなこ夢とあこがれ
鼻歌のふしぞをかしき。

さまよひ

白雲の上にとやまぬあこがれに、
人に續きてをどろ道
小笹の道をかきわけて、
覺束なくものぼりてし
「哲學」の峰唯寒し。

音さゆる流の末をゆかしみて、
のぞみ一筋下り行く
船路の遠を見わたせば、

はてしも知らぬ蒼波や、
「宗教」の海に唯迷ふ。

我終にとめしは花の八千草や、
綠の木々のをちこちに
總なすしげみ、百鳥の
歌につれびくせゝらぎや、
「藝術」の野邊の唯嘻し。

質屋の藏

そとの嵐を覗へば、
ふとのをのゝき身に迫る。
こゝら家並の中にして
一きは著るき白壁の
あらしとせめぐや。

著るき白壁我知れり、
質屋の藏の白壁と。
丈高き屋根の赤瓦、

峰はよろへる黄蘗に、
あらしとせめぐや。

もろく奪られし我がやから、
ひくく買はれし家の子が
いましめられてまもられて、
質屋の藏の白壁の
あらしとせめぐや。

もとよりあかぬ別とて、
復かへすべき企に